

(寺社建築の用材。)

要件、強度、耐久性、加工性等が考慮される。使用される主な樹種は、桧、松、櫟、杉、その他。また桧と櫟にはすぐれた特性があつて、桧は伐採後、一百年ぐらゐまでに、約三割ほど強度が増す。そしてほぼ千年後によつやく伐採時の強度に戻る。それに対し、櫟は、伐採直後には桧の約二倍の強度を持つのだが、劣化が早く、数百年を経ないうちに桧より弱くなる)

樹木というのは伐採されると、それでその生命は終わりなのだと思つていた。製材され加工され、木造建築や家具の用材となる。一点の狂いもないまっすぐな柱があれば、育つたままの姿の梁もある。二百年、三百年、と持ちこたえる木造家屋がある。せいぜい十五年、二十年でおしまいとなる木造建築もある。材質と組み立て方によつてそうなるというが、何よりも、そこには人の技量、そして、思い、が大きく関わるのではないか。

それにしても、樹木が生きていくということは、桧にしる、櫟にしる、松や杉、いずれも地に根を張り、天を突き、風を受け、陽射しに輝く。そついう姿を指すのだと思つていた。根から離れ、叢に横たわる、あるいは、削られ、柱や薄い板になる、そついう状態になつても、数百年、あるいは千年、その間、いのち、と呼べるものがある、そつなのだろうか。その折々、様相を変え、だれにもさとられず、ひそやかに息を継ぐ。そついうことなのだろうか。

樹木だけではなく、中国で古くから語り継がれた物語に九尾の狐といつのが出てくる。千年余りも修行し、美しい女に化身し、人を惑わし、国を滅ぼした。狐は少々妖しい動物だとわたしも思つている。子供のころ一緒に暮らしていた母方の祖母は、何か変わったこと、奇妙な出来事があると、狐のしわざだと叫んだ。歳を経た猫はなんにでも姿を変えられるといふし、ついこの間、河童がいる、と頑固に主張する老人に出会つた。ときどき一緒に酒を酌み交わすのだそつだ。絶対、人には言つたと囁かれたが、多分、誰にでも話しているはずだ。

とにかく、不思議なことの正体は、本当のところだれにもわからない。

清浄であるべき寺社建築の用材、しかも永く生きてある、いのち、なら、話し相手を見

極める、そんな能力をきつと持っているはずだ。そして他の、いのち、あるもの、これならさしつかえあるまいと選んだ相手となら、ときおり語り合つ、などということがあつていいのではないか。数百年、千年。ずっと黙りつきり、などということがあつてはいい。と、いつても人間並みに噂話に悪口、などということは考えたくない。それ相応に折り目正しくあつてほしい。それに年がら年中お喋り、というのも、なんだか重みがないから、話し合いがあるとしたら、十年か二十年に一度。それとも満月の夜だけに、とか。好き勝手な注文を、とは思つけれど。まあ、いいではないか。たまにはこんな、それこそ年を経た狐が見る夢のような話も。

それで、あの、ちょっとお訊ねいたしますけれど、その十年か二十年に一度、それもたつた今、わたしが勝手に決めたことなんですけれど、それが今日、というわけにはいきませんか？ 例えば、ここにこうして立っているわたし、だれが見ても、どこから見ても、害のない、こんな老女になら、今晚は、などと呼びかけてやってもいい、などとは思いませんか？ ちょうどまわりにはだれもいませんし、それになんかこう、人恋しくなるような、春の暮れ方ですしね。

わたしは立ち止まり、声を潜めて呟いた。気になる来客に向かうように我知らず丁寧な口調になっている。気取つてもいる。人恋しい春の暮れ方だなんて。相手がいないから口に出せる。

こんな話を聞いたことがある。年老いた工匠が床柱にするための木を探していた。何日も山を歩きまわっていたが思うような木が見付からず落胆していると、ふとだれかに呼ばれたような気がした。声ともいえず、聴こえた、ともいえないのだが、とにかく何かに導かれるまま、始めて訪れた山中の村を歩いていると、もう住む人のいない廃屋に行き着いた。するとそこに求めていた樗の古木が横たわっていた。

いつだったか、海岸で流木を拾った。小さな木こぶが幾つかある、先細りで、ほぼ真っ直ぐな長さや握り具合が杖にちょうどいい。まだ潮の香りのうすい浅春の海辺だった。家に持ち帰り丹念に水洗いしたあと、よくよく眺めると、ただの薄汚れた棒切れでしかなく、そのまま裏の軒下に立て掛け、すっかり忘れてしまっていた。思い出したのは半年以上も経ったあとである。灰色になって軽々と乾いた棒切れは、ところどころ樹皮らしいものが残っていて、全体に無数の小さな穴が空いていた。すぐにでも折れてしまいそうな脆い感じなのに、そのあたりの庭石に打ち付けてみたら、折れもせず、かえって手首を跳ね返すほどの弾力が感じられた。ただの枯れ木にしか見えないのだが、この強さは一体、なんだろ。なんの木だろう。そしてどれほどの歲月、潮に漂っていたのだろう。故郷の山あい

か谷間での朝夕、さらさらと梢が風に鳴るように、波音も心地よく響いていたのかもしれない。枝を裂き、幹を揺るがす冬のあらしと、潮鳴りやとどろく荒波とは、ひたすら漂っただけの身に、あるいは同じに聞こえていたのかも知れない。

あなた、どこからきたの？ 目をつむって耳を澄ませてみたが、答えはなかった。

あなた、どこで生まれて、なぜこんな砂浜に流れ着いたの？

あの灰色の棒切れが答えなかったのは、十年、二十年、いう時間の切れ目ではなかったからかもしれない。それに満月の夜でもなかった。

うす闇が広がり始めていた。かすかな風の音。茂みのそよぎ。樹木の枝の擦れ合う音。虫の羽音。

ねえ。なにかいつて下さいな。あなたが人と話せるなんてことは、絶対、内緒にしておきますから。

かまいませんよ。別に内緒にしなくても。人と話すなんてことは、これまで数え切れなほどありましたからね。で、おっしゃるとおり、今晚は、奥さん。はじめまして。

こちらこそ、はじめまして。

言葉遣いが少々、軽すぎるような気がしたが、わたしに合わせてくれたのだらう。

3

こんな老女になら、とおっしゃいましたが、私よりずっとずっとお若いですよ、まあ、おじいとお三百年ほど。

海沿いにある小さな町の高台に真宗の古い大寺がある。

時の領主が建立のための土地を寄進したのは、今から四百年あまりも遠い昔のことである。この寺の本堂は、何度か修復、再建された、と推測されるのだが、七年前に始まった二百年ぶりという抜本的な大改修が、去年の秋、ようやく終わった。文化財建造物の修理事業としては最大規模のものだと聞く。本堂の次は庫裏の保存修理に取り掛かる予定だといっ。

寺は本堂を始めとして、総門、唐門、式台門、宝蔵や経蔵、書院などと合わせて十二棟が、近世真宗寺院の典型的伽藍配置を構成しているとして、国の重要文化財に指定されていた。その他、絵画彫刻、書跡、工芸品、古文書など二三七点もが県の有形文化財となっている。修復事業の概要という冊子がある。それによると、

(改修では建立当時の古材は努めて再使用する。例えば、柱の下部が腐朽している場合、

安易に取り替えるのではなく、下部のみ新材で繋ぐ方法を採用する。なお古材とは、基礎石から棟まで建物に含まれている材料をすべて含んでいる。古釘までもが再使用されている）

わたしはこの寺の、普通の家では台所と称する場所に入ったことがある。どういふ事情で寺を訪れたのかは記憶にないが、たしか何人か連れがいたはずだ。一人きりになったのは、連れからはぐれたか、好奇心からか、よく覚えていない。嫁いで間もないころの四十年あまりも昔のことである。

呆然として眺めた大きな釜、竈。それが一列に並んでいて、わたしには数十もあつたと思えたが、いくらなんでも、そんなに多くはなかったろう。高い天井は太い梁が何本も重なって走り、天井も梁も周囲の壁も、すべてがすすけて真っ黒だった。嫁ぐ前、わたしが両親、弟と暮らしていた二階建ての市営住宅、五、六軒がそのままそっくり入りそうな広い厨房は、日中だというのに細部は見極めようもないほど暗かった。それでもどこからか差し込む薄い明かりに、さらに暗い穴倉の口のような箇所があつて、わたしはそつと覗いてみた。思いがけないほど幅広な廊下が暗かりの奥に伸びている。ところどころにかすかな明かりが洩れていた。恐る恐る足を踏み入れると、高くきしんで、板がしなった。歩き出すと、精一杯足音を忍ばせているにも関わらず、そのつど遠くのほうにまで細くするどい音が響いた。廊下は、うっかりすると体ごと滑りそうになるほど傾いている。両側は壁か襖か、だがそれを見定めるほどの距離は歩けなかった。いきなり荒々しい音がして、弱い明かりが流れるようにわたしを照らした。外光ではない鈍い黄色い明かりだった。

目の前に小柄な老人が立っていた。

老人の叱責はすさまじいものだった。ここは高貴な場である。お前のような身分の低い者の立ち入る場所ではない、たしか、そういったような趣旨だった。相手の言葉のあまりのげげしさに、わたしは呆然と立ちすくんでいたのだが、同時にどこか現実離れた、ちぐはぐなおかしさがあつて笑い出しそうになった記憶がある。

住職は、そのころ、御前さま、あるいはご連枝と呼ばれ、町民にとっては、雲の上の人のような存在であつた。境内をとりまく土塁、堀の跡は、寺がこの地に移る以前からそこにあり、中世の城郭遺構と推測されていた。

格式高い城郭寺院は、空ぼりと、崩れた土塁、土手に囲まれ、それらの背後には常緑広葉樹の深い古木林が連なっていた。浅いほりは、ところどころ覗き込んでみても底の見えない箇所がある。厚い茂みの陰は、日中でもしんと暗く、一面に繁茂する羊歯類が猛々しく不気味だった。

広葉樹は椿の木が多く、春も深くなると深紅の花が空ほりを埋め尽くした。

ささやかな船着き場から帆船の出入りする浦。

港湾施設の完備した近代港。そつなるまで四百年近い歴史を持つ港町である。夕方からは無人駅になるローカル線の駅前には、町一番の大通りだった。といつてもしごく閑散とした通りだった。港湾施設を出入りする大型車、その他は、海沿いにしばらく走ったあと、十間道と呼ばれる幅十メートルほどの、町を縦断する国道をいく。町の背後は深い丘陵が広がり、そこを抜けると人口十七万ほどの小都市になる。町を走るのは乗用車、路線バス、あとは週何度かの清掃車ぐらいだろうか。丘陵と河、海とに囲まれた静かな町である。

駅を出て通りを横切ると正面に緩い坂がある。真つ直ぐではなく、少しうねっていた坂を登りつめた先に寺の総門がある。

境内への工事車両の出入りのため、総門は解体せずに、建物はそのまま曳家という工法で移動させ、築地塀のみが大きく左右に開いている。坂道と敷地内に渡る部分には厚い鉄板が敷いてあった。総門が元の位置に戻るのには、引き続き計画されている、残り十一棟、すべての修復を終えた十三年後になるそうだ。改修の始まった七年前、総門がどんな形だったか、わたしには正確な記憶がない。重々しくいかめしい門扉。打ちつけた大小の鉄や鉄の金具。どこかで見たような、そんなありきたりの印象だけがすかに残っている。どちらかといえば、最初からこんな形、築地塀だけの入り口のような気がしていた。

町なかのことにまるきり無関心というわけではなかったが、舅、姑が健在な、不慣れな商家に嫁いで以来、家と子供にかまけるだけの毎日だった。わき目も振らず言いつけ通りに働いていた。わたし自身の性格の弱さにも原因があるのだろう。引つ込み思案で何事もすぐあきらめが先に立つ。

高名な寺の、いかにも人を寄せ付けないふうなたたずまいに、はなから恐れをなしていた。でも椿の花は好きだった。花の季節、暇を見つけてはよくこのあたりを歩いていた。うずたかく積もった花の塊の中に、しゃがみ込んでいたこともある。泣いていたのかも知れない。人が来ると、さも楽しみに花を拾っているふうを装った。嫁いですぐに実家の両親が亡くなると、弟は勤め先の都合で遠方の地に住むようになった。夫や子供と一緒に住む婚家が、当然、わたしの家のはずなのに、帰る家がないと、ときおり胸をつまらせていた。

よく十年一昔、というが、そんなことはない。十年などほんの一息で過ぎてしまう。嫁いできた日がまるで昨日のように思い出される。そして寺の修復の完成に向かって、これ

から始まる十二年は、どんなふうの流れでいくのだろう。やはりほんの一念か、耐え難いほど長いと感じるか、人それぞれなのだが、わたしの場合どうなのだろう。

年ごとに訪れる春の宵を、わたしはまた今日と同じように、物思いながら歩いているのだろうか。

総門を入るとすぐ目の前が浅い空ほり、ほりの向こう側に重要文化財の一つ、鼓堂がある。左手に波型のビニール板が張り巡らせてあり、そこに、案内所、及びトイレ新設工事と大きな文字で書いてあった。ビニール板で囲んだあたりの、かつて仄暗い茂みを作っていた木立や叢はそっくり消えてなくなり、そのからんと明るい跡に、コンクリートの土台の仕切りがそれらしく造られていた。

すぐ目につく場所に伽藍配置を略図で描いた案内板が立っている。通路は右側が式台門、ほりに沿った左側は唐門に通じていた。唐門をくぐると境内になる。七年間、境内は立ち入り禁止だったが、本堂修復のあとは、本堂、境内ともに立ち入りには入場チケットが必要になった。今日はふと思いついて寄り道をしたただけなのでチケットは用意していない。遠くから修復されたという本堂を眺めて帰るつもりだった。家からほんの二十分足らずの距離なのに、境内に足を踏み入れたことは数えるほどしかない。そういえば、だれにもらったのか、あのチケットは、どこへしまい込んだのだろうか。

鼓堂は、二重二階の入母屋造りである。昔、そこで打ち鳴らす太鼓の音が時刻を知らせていたのだという。あるいは、なんであれ変事するときなども、町民に知らせる役目が寺にはあった、のではないか。

夫がまだ七、八歳のころ、仲間と連れ立って寺の境内で遊んでいて、そんなとき、がき大将だった一人が鼓堂に忍び込んだ。遠巻きに眺めていた仲間に、彼は二階にまで登ったと威張り、そこに、これまで見たこともないほどの大きな太鼓があったと、誇らしげに告げたそうだ。

ぼくは弱虫だったから、怖くて、遠くで眺めていただけだった。夫はそういつていた。いつでも逃げ出せるようにね。でも、その時代、太鼓がまだそこにあっただなんて、ちょっと信じられないな。

幼い子供たちに、怖い場所、そう思わせる雰囲気がある。そのころの鼓堂にあった。今は屋根瓦だけが重たげに、いかにも枯れ枯れとした面持ちでそこにある。

幅の狭いほりと、そのうち立派なトイレや案内所になるはずの空間との間を、二十メートルほど行くと土塀に突き当たる。その手前、ほりに掛かる小さな橋の先に、高くそびえる唐門があった。

こころ、四、五日、寒さがぶり返し、昨日も一昨日もみぞれ混じりの雨だった。そのせいで、ほりは、ふだんは浅くえぐった細長の溝でしかないのに、今日は満々と水を湛えていた。本当は、これはただのほりではなく、ときたま地表に顔を出す一本の川の流れなのかもしれない。ある日、目に見えない暗渠から吹き出した水の流れが、また、見えない暗渠に吸い込まれていく。良きにつけ悪しきにつけ、さまざま歴史を持つ大寺には尋常ではない何かがある。

あたりに何本もの櫨の大木があった。縦横に枝を広げた巨木は、空いっぱい繊細な網目模様を描いている。無数の折れ曲がった枝の広がりには、どこか奇怪な生き物のようにも思えた。薄くなった陽射しのせいで、急にものの影が濃くなったせいかもしれない。観光客が日によってはバスで何十人も乗り付けると聞いていたが、今日は人影一つなく、しんと静まり返っていた。

まだ芽吹かない木々は寒々としていて、そのせいか樹木の数がひどく少なく感じられた。夏の日の、あの燃えるような緑が嘘のようで、わたしは一本、二本と数を数えてみた。ほりの向こうには鼓堂から唐門に続く土塀がある。土塀とほりの間の土手にはこれは櫨だろうか、やはり落葉樹の大木の根方に、何本と枝分かれた椿の高木があった。十メートル近くもありそうだった。厚ぼったい葉むらの奥に、ふと赤い色が見えたようでわたしは目を凝らした。もう花の咲く季節になった。

式台門のある右側から出てきた白いライトバンが視野のうちに入って、それが入り口に敷いてある鉄板のあたりで止まった。そのまま動かないふうなのが気になって目を向けると、運転席の男がじつとこちらを見ていた。かなり年輩の男だった。咎めるふうな目付きだった。うるんなものではないことぐらい見てわからないか、とわたしのほうも目を逸らさずに見返していた。睨み合いのような時間が二、三分続いて、ライトバンは鉄板の上を音高く走り去った。

唐門の向こう、本堂に向かう参道に添って、いかにも仮小屋らしい建物が造られている。そんな場所になぜ小屋かと、わたしは首を伸ばして覗き込んだ。人影は見当たらない。建築事務所か、資材置き場でもあるつか。それにしても、本堂以外、まだ修復途上の現場のはずなのだが、そういう場所で、必ず匂うあの木の香りがしない。それとわかる鮮烈な木の香りがどこにもなかった。

(屋根を支える小屋組の材料は虫による著しい被害を受けていたが、それでも取替えはせず、補強の梁を新たに挿入する工法を用いた。補強の梁は、樹齢 約二百年の松材である)

ほりの水にさざ波が立っていた。それとわからないが風が強くなったらしい。あの物音は、水音ではなく、梢の揺らぎでもない。唐門のきしみだろうか。

今から二百三十年あまり昔、遠い地で築かれた唐門は、その後、北前船によってはるばると海を渡り、この地に移築された。「銅板葺切妻造屋根」「前後唐破風造」という門構えは全国にもあまり例のない形式なのだ。ほりの手前に立つ案内板に書いてある。

なるほどそうなのか、長い間知らなかった。これは大変、価値のあるものだと、わたしは改めて見上げ、見回した。

「牡丹唐草の腰欄間」「雲波籠の欄間」などがあるが、国の重要文化財はひたすら黒々とかめしく、牡丹の花も雲も竜もわたしにはみな同じに見えた。

長い参道の先の本堂は、輪郭がはや淡くなり、柱だけが薄白く浮き上がっていた。はるかな歳月が、あるものは横たわり、あるものは立ち上がっている。

櫺の良木は日当たりの悪い谷間にこそ育つのだと聞いた。わずかな陽の光をひたすら溜め、ゆっくりと数百年をかけ育っていく。

(建具のほとんどは櫺材が用いられているのだが、多くに櫺の欠点である擦れが生じていた。特にねじれの著しいものは、機械によって熱と圧力を加え、修正を図った)

かわいそつに。どんなにか熱かったろう。

痛い、と叫びはしなかったろうか。

われらを哀れむのは無用です。

風と光。雪やあらしまでが、すべてあなたの手のうちにあった。百年、千年。今の自分が、かなしくはないの？

いいえ。なぜそのようなことを問われるのですか。それに、かなんでいるのはあなたのほうではありませんか。

わたしが？ なぜ？

そうかもしれない。過ぎた日を懐かしんでいるのは、悼んでいるのは、わたしのほうがもしれない。

遠い昔、あのころ、絶えず幸福の予感があった。あのころ、たいがいはだれかが好きだった。日が暮れるとわたしを呼ぶ声が聴こえた。遠くでだれかがわたしを呼んでいた。そんな気がしてならなかった。

些細なことに歡び、些細なことに泣いた。いつも傷ついていて、でも、いつも満ちていた。縁までいっぱい水の入った透明な壺。いくら飲んでもあの水は決して減らなかつた。本当に、あれらはみんなどこへいったのだろう。

弟が生まれたとき、わたしは十歳だった。ずっと一人っ子だったから嬉しくてしようがなかつたのだけれど、でも年齢が離れすぎていて、遊び相手にも話し相手にもならなかつた。しょっちゅう引越しをしていた。お父さんの会社の都合よ、と母はいつていたが、あとと考えてみると、父自身の個人的な不始末から、ということもあつたらしい。

引越した先のある町で、そこには、物心ついてから、十二、三歳ごろまで、比較的、長く過ごしていた。弟はその町で生まれている。広い電車通りの裏側、酒屋やうどん屋、肉屋に八百屋、畳屋などが軒を並べる狭い通りだった。そこには、その年齢の子供だけが持つ、充実した時間が詰まっていた。

家並を埋め尽くす、今よりもたくさん降つた雪や、今よりもずつとかがやいていた夏の空があつた。

十数年後、わたしは間を置いて二度ばかりその町を訪ねている。行き帰り、五十メートルあるかなしかの短い通りだった。そのときはごくありきたりの懐かしさだけで、それほど切実な思いはなかつた。むろん懐かしくはあつたが、物珍しさが先立ち、軽やかに通り過ぎていく。ほかにも心を捉われることがたくさんあつたし、わたしはまだ若く、過ぎた日々より、まだ手にできずにいる遠い場所が気になつてならなかつた。刺すような想いに捉われるようになったのは、ここ数年の間である。

昨年の春の、もう終わりがさだまつた。わたしはその通りをゆつくりと歩いていく。

半世紀が過ぎて、町並みは大きく変わってしまった。変わるというより、記憶にあるものは何もなかつた。通りの角にあつた畳屋のようちやんの家は駐車場、その斜め向かいにあつた八百屋のきようちやんの家のあとは白塗りの瀟洒な造りの歯科医院だった。もと住んでいた家のあたりは正確ではないが、大体、見当はつく。雨が降っていても、きようちやんの家まで傘をささずに行けた。

家は借家だつたと母に聞いている。

借家が四軒並んでいて、端から二番目の家だった。玄関から奥に向かつて部屋が、確かに縦に三つ、明かりが入るのは玄関と奥の縁側からだけで、家の中はいつも薄暗かつた。大

家は表の電車通りに店を構える呉服問屋だったと、これも母から聞いている。何より強く心に残っているのは庭の広さだった。借家一軒の家の庭ならたかが知れているが、そこは借家四軒分の裏庭全部引くくめて、それが表通りの呉服問屋の蔵のある庭にまで続いていた。ただ中ほどに垣根があつて行き来はできないようになっていて、垣根の向こうは、丈高い庭木が立て込んでいて、その奥に土蔵の白壁が透けて見えた。垣根からこちら側は、これはひどくさばさばとしていて、それでも夏になると、よく茂る木が一本あつて涼しい木陰を作り、わたしはその下にあつた平たい敷石に腰掛けて、よく本を読んでいた。

わたしは思わず足を止めた。

金文字で会社名が書かれたガラス戸が半分開いていて、その向こうに乗用車が一台と大きなダンボール箱が数個、そのまま突き抜けた奥が、思わず目を見張るほど広々とした空き地だった。鮮やかな色が地表を彩っている。

天井は低いが乗用車が四台ほどは充分停められそうな空間だった。いかにも町中にある店舗らしく、そこが倉庫兼、駐車場らしい。もし車が四台も停めてあつたら素通しのガラス戸でも奥までは見通せなかつたろう。横手に簡単な仕切りがあつて、そこが事務室でもあるのか、何気なく覗くと机や椅子などそれらしい造作と人影が目に入った。横に長い店舗だった。

わたしは呆けたようになつてその場に立ちつくし、事務室から出てきたらしい女に声を掛けられて、ようやく我にかへった。

「ごめんなさい、ぼんやりして。あの、もし差し支えなければ、そこのお庭、拝見させていただけませんか。ずっと以前ですけれど、このあたりに住んでいたことがあつて、そこに広い庭があつて、ですから、あのお庭がそうじゃないかと、あの、まだちっちゃな子供のころなんですけど。」

わたしは思つように言葉が続けられず、どきまぎと頬を赤らめていた。まあ、そんなのですか、さ、どうぞ。どうぞ、入つてくらんください、女の明るく気さくな口調に私はほつとして足を踏み入れた。

広いには広いが、それでもあのころの印象よりはずっと手狭な感じがした。高いブロッケン塀で囲つてあるせいかもしれない。それにむろん、子供と大人とでは目線が違う。正面、塀の向こうにビルがあつた。何階建てなのか見えているのは裏側で、よくわからない。割合、低いビルだった。庭はすべて赤煉瓦で仕切つた花壇になっている。赤や紫、黄色など原色の小花類が地を覆っていた。庭木の類は一本もない。これ、みんな父の趣味なんですよ。少し困つたふうにも聞こえる女の口調だった。

そうですか、綺麗ですね、とても。素晴らしいながらわたしはあたりを見回していた。隣の家の屋根瓦やひさが、塀の上に乗るで乗りかかるように迫っていた。これだけ広い庭があるのは、このへんでうちだけなんですよ、このあたりは横も後ろもみんな詰まっています。と女がいった。

子供のころの記憶なんて曖昧ですけど、でも、多分、ここに間違いないと思います。女が手首の時計に目を落とすのを見て、ありがとございまして、とわたしは丁寧に頭を下げた。それからふと思いついて何気なくいった。昔は庭の真ん中に井戸があったんです。

あ、井戸ならあります、と女が答えた。不意にあたりが大きく揺らいたような気がしてわたしは足元に力を入れた。あそこです。井戸を埋めるのは縁起が悪いと父がいまして、厚い鉄の蓋を被せて、その上に樽を、あの、ほら、そこにあります。

いわれるまで気がつかなかった。花畑の中にワイン樽だろうか、灰色の樽が伏せてあり、その上に花鉢が乗っていた。

井戸に近づくことは嚴重に禁じられていた。父に見付かると大変だったけれど、母の監視の目はかなり緩くて、わたしにはこわごわ井戸を覗き込むことも遊びの一つだった。長い竿の先に釣瓶をつけて水を汲んでいた。夏にはさらし木綿で作った袋に西瓜や黄色い瓜を入れ、口を括った縄を長く井戸に垂らして冷やしていた。暑い午後、よく冷やした西瓜や瓜を食べる。そんなことが何かとても素晴らしい出来事に思えたものだった。

あの、前に住んでいらしたという、さんでしょうか。いいえ、違います。あ、でしたら、さん？ いいえ。あら、それじゃ、女は叫ぶようにいった。私、まだ生まれていません。

目を見張った女の、掌で押さえた両頬が赤らんでいる。五十年代、後半ぐらいだろうか。この庭で、ようこちゃんやきようこちゃんとままことや人形遊びをしていたころは、一年毎に時間が区切られていることを格別、意識することも、ましてその重さなど考えもしなかった。この世から父や母がいなくなるなど、そんなことはあり得るはずもなく、なんの差し障りもなくすべては続いていくものだと思っていた。

不思議な生き物を眺めるように、わたしを見詰める女の目がかがやいていた。自分が生まれる前など、星を眺めるほどのかなたにある……。

ここに住んでいらしたのは、そんなに昔のことなんですか？
ええ、そうです。わたしがまだ小さな子供だったころ。

百年、千年、存外近くにある。あるいは、歳月など遠くも近くもみな同じ。べつです、

そつは思いませんか。

本当に何もかもがほんの一息。

本堂の四隅の軒裏に、棟木に押しつぶされた形でうずくまる小動物がいる。地元ではいつのころからか、この小動物を「猿」と呼んでいた。しかしよく確かめると、これは猿ではなく、「邪鬼」とするのが伝統にかなっているそうだ。仏教では猿をこんなふうにいじめることはせず、むしろ西遊記の孫悟空のように仏教外護、の立場に立たせるのだという。

邪鬼は醜悪な形相と恐るべき怪力を持つ想像上の妖怪とされているが、起源がインドのバラモン教に求められる、いわば由緒ある妖怪、ということになっている。

そつが、知らなかった。妖怪にも血統の良し悪しがあるのか。

普段目にするのできる邪鬼は、持国天、増長天、広目天、多門天。四天王像の足に踏みつけられている裸形の姿である。仏の足に踏まれているのだから、苦悶の形相と見るべきなのだが、その形相には、独特の、どこか滑稽な面白さがあった。

遠目にはよくわからないが、この寺の邪鬼には、目玉や乳首、膨らんだ腹の中心、へそあたりにちょうど円形の木目がくるように工夫されている。目の通った素木でなければ表現し得ない技であると同時に、工匠の遊び心から生まれたものだという。それが邪鬼の苦悶の表情を笑いに変えてしまっている。

なんだか、かわいそつ。いつも笑われてばかり。鬼なんだから仏様に踏みつけられるのは、それはしょうがないとしても、あの目玉や乳首、あの大きなおへそ。あんなおへそをくつつけられたら、笑われるのは当たり前でしょうに。

あれらはあれらで、笑われることを楽しんでます。哀れみなどがえって無礼です。もともとわれらにへそなどあるわけがない。あのような造りが何かはわからぬまま、人々が楽しむことを喜んでいます。まあ、あれは少々、出っ張り過ぎてはいますがね。

へそが出っ張りすぎ……。格式高い寺院の、千年、数百年にわたる住人たちは、たとえ出自が山であれ谷であれ、もっと優雅なそれらしい言葉遣いでもって話すのではないか。といつてもわたしにその時代の話し言葉などわかるわけがない。詳しく知っていたら、もっと深く話し合えたかもしれないのに。

寺院の境内とその周辺には、遠い昔、そのあたりが国府であったことを窺わせる遺構、遺物、地名が多く認められるという。国府とは国庁の所在地、または国庁を含む都市的空間である。また国庁とは朝廷が任命した国司（官人）が政務をとる施設の総称をいう。いつのころか、この国庁に任命された国守は高名な歌人であった。この町では、その歌人に連なる学習講座が盛んであり、その講座に一度出掛けたことがある。去年の夏、七月も終わりの暑い午後だった。

町外れの高台に鉄筋コンクリート造り平屋建て、春夏秋冬を現す庭園に囲まれた、この町にはやや不似合いなほど規模の大きい建物がある。国守であった歌人を中心とした常設展示室やその時代の資料、文献、情報などの収集と研究なども行う場であった。

その日の学習講座の演題は、一品の皇子に嫁いだ（皇子はのちに薨じ、彼女は再婚する）ある高貴な女性の「怨恨歌」であった。

家から歩いて三十分足らずの道のりは、ほとんどが緩い坂である。わたしは日傘をさしてゆっくりと歩いていった。暑さがきびしく、こごずつと冷房の利いた室内に、閉じ込められたような毎日が続いていた。高台に向かって行けば、海からの風も少しは感じられるのではないか。この町は海に面した緩い勾配、いってみればすり鉢のような斜面の上にあるのだが、すり鉢の縁、高台のあたりが、ここ数年、かなり違ってきた。丘陵を崩し畑地を潰すなどして家が増え、新興の住宅街があちこちに出来上がっていた。真新しいしゃれた造りの家ばかりである。その分、すり鉢の底、かつて栄えた回船問屋の跡地など、古びた家並みの続く低地は、無人の家や、取り壊された空き地が暗い穴のように目立っていた。十分あまりも歩いたらつか。流れる汗が目に入り、わたしは足を止めた。草いきれと陽射しの照り返しとで息が詰まりそうになった。

その年、というより、ここ十年ほどでの最高気温が測定された日だった。

ようやく目的の建物に着いて受付で教えられた講義室に行った。席は七割がた埋まっている。わたしは冷房の吹き出し口の真下の席をとった。

みるみる汗が退いて、最初の数分間はたとえようもなく気持ちが悪かった。が、すぐに頭と足元からも上る冷気とで、体がつめたくなっていくのがわかった。それでもまだどうというとはなく、周囲を見回す余裕もあり、一、二、三、知り合いの顔を見つけて会釈などし合っていたのだが、講義が始まるころになると腕に鳥肌がたち寒さで体が震えだした。席を移るつにもすでに満席でどうしようもない。梅雨ころから二度目になる講座で、真剣に学ぼうという受講生は、どこに席をとるべきかをちゃんと心得ていた。それに薄いはおり物や膝掛けなども用意しているのである。

講師の声がほとんど耳に入らないまま、我慢しきれずにわたしは講義室を出た。講師の

声だけがひびく静かな室内だった。

建物内にある広々としたティールームは室内の二面が、天井までガラス張りである。横手の一面は、四季のうちの、多分、春に当たる庭園。正面には深い木立の茂みが迫っている。熱いコーヒー茶碗を掌で包んで、わたしはようやくこわばった体を緩めた。

よく磨かれたガラスの向こうに迫る梢の先が、揃って大きく揺れていた。やっぱり、ここには、高台には風が吹いていた。茂みを行き交う小さな影がある。なんとという鳥だろう。今日の講座の演題は「怨恨歌」祝い歌ではなく怨恨歌であった。だから心に留まった。怨、恨。千年前の人の想いは、あまりにも遠すぎ、あまりにも捉えどころがなく、それだからこそ、そのときのわたしに何よりもふさわしいと思えたのである。

梅雨の始めごろだった。

娘が嫁いでいったあとの空いた部屋に、夫は机や書籍など自分のものを運んでいた。夫の机の抽斗には、日常、生活に必要なさまざまな小物、はさみや爪きり、セロテープ、クリップ類、印鑑、朱肉、などがきちんと納められていた。その日、とくべつ何か意味があって、夫の持ち物を盗み見しようと思ったわけではない。第一、わたしは用があることに、しよっちゅうその抽斗を開けていたのである。

思わずあつげに取られるほど、ぼろぼろになった茶色の封筒が無造作にそこにあった。たった今、読み終えて何気なくそこに置いた、そんな感じだった。

数え切れないほど触れていたのだろう、封筒は脆い布切れのように柔らかかった。

手紙の差出人は、親しいというほどではなかったが、わたしが独身のころ、ときたま会ったことのある人だった。共通の友人がいて、確か一緒に旅行したこともあった、はずだ。内容は女が男に書き送る別離の手紙だった。彼女が結婚したのは、わたしより先だった。間違いない。友人の家で、たまたま出会ったことがある。毎日、彼のお弁当を作るのだと楽しそうに話していた。なぜそういう些細なことを覚えているのか不思議なのだが、そんな雑談のあとで彼女は不意にわたしに向かい、あなたも早く幸せになってね、と話しかけてきた。生活上の教訓めいたことなども含め、どこかしみじみとした口調だった。が、そういう迷懐めいた言葉と、その人の口調、態度に、なぜか奇異なものが感じられて、そのところだけずっと忘れられないでいた。動物的な勘のようなものかもしれない。わたしはそのころ夫になる人と付き合いを始めたばかりであった。

彼女と夫が、そのころはまだわたしの夫ではなかったが、そういう親密な関係だったことをわたしはまったく知らなかった。

あなたが好きだからこそお別れする、あなたのことは決して忘れない。彼女は繰り返し

そう書いていた。

男のほうから再三再四、女の心を引き止める求愛の言葉があつたのだらう。が、彼女は断固としてそれを拒み、しかもそれとさくらせまいよう、すべてはあなたを好きだからこそ、と綴つてある。それは、わたしでなくても、だれにでも簡単に読み取れる、女にとつてごく都合のいい種類の内容であつた。

彼女は非常に条件の良い相手と一緒になつたということを噂に聞いている。

わたしたちの結婚が割合、素早く決まつたのは、夫のほうに早く忘れたい人がいたからだらうか。

夫にとつてはかけがえのない大切な人だつたに違いない。折にふれ、ときとして日に何回も、取り出しては読みふける。こすれた文字がすっかり薄くなつてしまつていた。だれにも見付からないよう深くしまい込んでいたのに、それがある日、読み終えたあと、ついつつかり、そのままにしてしまつた。

その手紙を目にしたとき、夫がそれを長年、しまい込んでいたことを知つたとき、わたしの中には恨みも憎しみもなかつた。何もなかつたといえは嘘になる。なにも無いと感じるのがかえつて怖いような、どうにも説明できない感覚だつた。

彼女は早く決着をつけたくて困りきつていた。それがなぜ手紙の受取人にはわからなかつたのだらう。女はこの手をよく使つた。

あなたが好き、世界で一番好き。ずっと好きでいたいから、だから、お別れしなければならぬ。

こんなに見え透いた嘘がなぜわからないのだらう。

わかつていますよ、なにもかも。いとしいのは、おのれ自身。なんといつ純であり、ひたむきであつたかと。年を経ることに、はやばやと失うこと、忘れ果てることのなんと多いことかと。

陽が沈んで間もない、まだ青みの残る空に月が出ていた。白い満月だつた。淡く塗り上げたような月にわたしはしばらく見とれてた。梢を揺する風の音が一瞬、途切れ、またさわさわとわたしを包む。

遠い街のどこか、雑踏の中で、それとも一人きりで、わたしと同じように、今、白い月を見上げている人がいる。みんな手の届かないところへいつてしまった。何もかもがおぼろになつてしまつたと、胸の底がやわらかく痛む。

白い月の出る春の宵には、みな同じ想いを抱く。

泣きたいような、笑いたいような。一つ、同時にできればいいのに。わたしはもう一度、空を見上げ、なんとはなしに背を伸ばした。

さあ、もう帰ろう。夫もそろそろ時計を眺めていることだろう。読まれているとは知らない古い恋文を、念入りにしまい込んで、そして妻を待つ。

われらも人も、いくなれば変幻自在。

総門前の坂道をわたしはゆっくりと下りていった。わき道から人声がする。若い人ではないようだ。穏やかな話し声が近づいてくる。わたしは少し足を早めた。

了

参考文献

重要文化財 勝興寺本堂の装飾彫刻

正和勝之助著 桂書房

(蓮如上人五百回遠忌法要参拝のしおりより)

1 雲竜山勝興寺の歴史 古岡 英明

2 本堂修復事業の概要 今井 成